

るなるえあ
く天羽狐の創作室く
三々梨弥生

「ナキ
くオオカミ少年は月夜に笑うく
」

少年はいつも嘘をつく。

「狼が来たぞ！」と、嘘をつく――。

* * *

夕日が木々の向こうに沈みきる頃、十四歳くらいの黒髪黒目の少年が一人、村の中へと駆け込んだ。

「狼が来たぞー！」

切羽詰まった叫び声に村人たちがぎよつとした顔を振り向ける。子供は慌てて家の中へ。代わりに、手に武器を持った男たちが飛び出してくる。

「狼はどこだ!？」

戸や窓が次々と閉められる。最後の一枚が閉められたところで、静寂が村を包んだ。

すると。

「あははっ……」

殺気をまとったピリピリとした空気の中、押し殺した笑い声が漏れ始める。「狼が来たぞ」と叫んでいた少年

だ。

男たちの表情が呆れ顔へと変わる。

「まーたお前か、ルーウエル。この大嘘つきめ！」

構えていた剣や猟銃をおろし、「困った奴だ」などと口にしながら、それぞれの家へと引き上げていく。『ルーウエル』と呼ばれた少年だけが、一人、往來の只中に残される。

閉まった戸に囲まれて、彼はしばらくの間、くつくつと肩を震わせて笑い続けていた。

一体いつの頃からだったろうか。村で嘘をつくようになったのは。

――と、ルーウエルは時たま、ぼんやりと考えてみることもある。はっきりとした時期は思い出せないが、きっかけは確か、父母と死に別れて一人暮らしになったことにあつたような気がする。

森の中の小屋で、たった一人での生活。心配した村人たちから何度も「村に來い」と誘われたが、その度に断り続けていた。不便は無かったし、『村で暮らさない』ことは、両親がずっと守ってきた選択肢だったからだ。(僕は彼らと共に暮らすべきじゃない)

『嘘』をつくたびに閉ざされる戸の数を、ルーウエルは日々、両親の考えが間違っていないことを確信していった。一人で生きる方がずっと気楽だ。

嘘をついて、あまりの滑稽さに笑って、村人たちが呆れて……そうして互いの距離が離れば、それで充分だった。

* * *

その日の夕暮れ時も、ルーウエルは村へと向かった。いつものように騒ぎになって、男たちが呆れて、戸が固く閉ざされる。夜が訪れる前の定例行事。何故かいつもよりも滑稽に思えて、笑いがいつまで経つても収まらなかった。その背中に声がかかる。

「こんばんは」
「えっ？」

村人は全員家へ帰ったと思っていたから、驚いた。振り返った目には誰も居ない夜道が映る——否、目線を少し下げると声の主の頭頂部が見えた。随分と背が低い。見知らぬ少女だった。ルーウエルよりも二つ三つ年下

……十二歳程だろう。ふわりと背中に広がる桃色がかつた金色の髪と、宝石みtainな茜色の瞳。ふっくらとした頬が野ばらのように色づいている。

「……君は？ 村の子じゃないね」

ルーウエルは少女の服装を見て言った。上等な生地を使って作られたフリルたっぷりの服は、森近くの村では、そうそう目にするものではない。

少女が人好きのする笑みで答える。

「今日、ここに着いたばかりなの。素敵な村ね」

「本当にね」

……彼女の笑顔を見ながら考えた。同じ「笑い」でも、自分とこの子とでは、なんて差があるんだろうか……。少し、意地悪な気持ち膨れ上がる。

「茜色の目のお嬢さん。初めてこの村に来たのなら、教えてあげるよ」

少し屈んで目線を合わせた。囁き声で告げる。

「この村ではね、陽が沈んだら、月が出る前に家に帰らなくちゃならない。戸をしっかりと閉めて、決して外に出てはいけないんだ」

「どうして？」

「森の中に、凶悪で獰猛な人食い狼が潜んでいるからさ。月夜——特に満月の夜になると、獲物を求めて村までや

つて来るんだ。君みたいな女の子がウロウロしていると、八つ裂きにされて、頭からパツクリ食べられちゃうぜ」出来る限りの低い声で。この手の話は最初が肝心なので、たっぷりと脅しておこうと思ったのだが……。

少女がくすくすと笑った。

「村の人が、あなたのことを『大嘘つきのオオカミ少年』って呼んでいたわ」

「ちえっ」

……出鼻を挫かれた。「狼が来たぞ！」と言い続けた拳句に村人につけられた通称・《オオカミ少年》。誰かが早速、少女の耳に吹き込んだに違いない。

「私はナキという名前なの。オオカミ少年さん、あなたの本当の名前は？」

「ルーウエル」

答えながら、ルーウエルは空を仰いだ。そろそろ月が顔を出す時間だ。……早く、家へ帰らなければ。

少女の背後——道の向こうに手提げランプの明かりが見えた。こちらに向かって駆けてくるようだ。彼女の保護者だろうか。

「それじゃ、僕はもう行くよ」

村の出口へと歩き出す。数歩進んで立ち止まり、振り返って、少女・ナキの茜色の瞳を見つめた。

「人食い狼が来るから、月の出ている夜は、家から出てはいけないよ。特に、満月の夜はね」

真顔で嘘をついた。

言うだけ言って、ルーウエルは駆けだした。そのまま村の出口を抜ける。

最後にもう一度振り返って見た時、ランプを持った青年が少女に何か言い聞かせているのが、夜の暗がりの中で微かに見えた。

(彼女はもう、僕の言葉を信じないだろう)

ルーウエルにとってそれは恐ろしいことであり……

同時に、ほんの少しだけ、嬉しいことでもあった。

夜道を辿って、森の小屋へと帰り着いた頃、木々の隙間から覗く空には、ほんの少し欠けた月が上がっていた。(次の満月まで……あと数日も無いのか)

戸を開けて小屋の中へと入り、しっかりと鍵をかける。そして更に、その上から鎖を巻いた。これでもう、ちょっとやそつとでは、この戸は開かない。

ルーウエルは明かりをつけずに小屋の中を歩き、窓際に置いてあるベッドに腰掛けた。膝を抱き寄せ、周囲の音に耳を澄ませてみる——。

自分の心臓の鼓動。

落ち着いた呼吸音。

窓ガラスをかすめてゆく風音。

木の葉のざわめき声。

夜行性の動物が土を踏みしめて歩く音。

夜鳥の鳴き声。

ウサギが草むらを駆け抜ける。

フクロウが獲物を見つけて枝を蹴り、羽ばたきながら

飛び掛かった。

巻き添えを喰うまいと森はずれを目指して逃げ出す

野ネズミ。

誰も居ない森はずれの丘の上で、ひっそりと咲いた小

さな花が夜風に揺れた……。

「……」

小屋の中、ベッドの上で一人、閉じていた目を開ける。

かつては親子三人で暮らしていた空間は静まりかえり、

使い込まれた家具たちが、闇の中で無数の細かい傷跡を

晒していた。

……一人で住むには、この小屋は、ほんの少しだけ広

すぎる。

窓の外へと視線を移した。明るい月光が森の中をほの
蒼い色に染めている。

ルーウエルはしばらく、夜の森を眺めていた。窓ガラ
スに薄っすらと映りこんだ影が、黒銀色の双眸で、じつ
と一人きりの少年を見つめていた。

* * *

この王国は大昔、多くの魔物にあふれていたらしい。
——おとぎ話にしか聞こえないその話は、多くの子供
たちが幼いうちに聞くのと同様に、ルーウエルも当然聞
き知っていた。

嘘みたいな、国の誕生秘話。一人の王が伝説の白銀の
剣で魔物どもを斬り払い、人間が安心して暮らすことの
できる王国を創ったのだという。だから王国の民は何を
も恐れることなく、日々を平和に暮らせるのだと。

(そんなものは嘘だ)

というのが、ある程度の年齢を重ねて今に至ったルー
ウエルの素直な感想だ。実際問題、町では犯罪者による
被害が絶えないし、辺境では常に野獣の襲来を警戒しな

がら生活しなければならぬ。「恐れるものが何もない」などというのは幻想だ。

村人たちは家畜を食い荒らす狼を恐れている。彼らにとつて、狼の存在は迷惑そのもので、剣や猟銃で討ち殺すべきものだ。

ルーウエルにとつても、狼は恐ろしい存在だった。赦せない存在だった。

理由は——かつて、森に現れた『狼』が両親を死に至らしめたから。

いつか狼が自分をも喰い殺しに来るのではないかと思うと、夜もおちおち眠れない。村人が喰われるのではないかと思うと、心配でしかたがなくなる。

だから、月夜が来る前に村へ行き、「狼が来るぞ！」と叫んでみる。村人がきちんと家の中に避難できるかどうか、素早く狼を討ち殺せるかどうか、この目で確かめてみるのだ。閉ざされる扉の数が多いほど、ルーウエルは安心して、森の小屋へと帰ることができた。

月夜の晩は狼が来る。満月の夜は、絶対に家の外に出てはならない。

月の光に誘われて、残忍で血に飢えた人食い狼が、森の中からやって来るから……。

* * *

そして迎えた、満月の日。

夕暮れには少し早い時間に、ルーウエルは村を訪れた。この日ばかりは、夜が近づくのさえ恐ろしかったのだ。

「狼が来たぞ！」

いつもの叫び声に村人たちがぎよつとした顔を振り向け——少年の姿を見て呆れ顔になる。

「ああ、まあたお前か、ルーウエル。今日はいつもより早いな」

村人たちは木材で舞台のようなものを造っていた。ルーウエルの視線に気づいたのか、男たちが笑う。

「今夜は祭りだよ。ルーウエルも来るといい。旅芸人や露天商が来るから、賑やかで楽しいぞ」

「今夜……!?!」

全身から血の気が引くの、ルーウエルは感じた。「だって今夜は……満月だ。狼が来る……」

「かがり火をたくさん焚くから大丈夫さ。野生の動物は火を恐れる。村には来ないよ」

「狼は来るよ。火なんか恐れない……。祭りなんてやめるんだ！ 満月の晩に外に出たりしたら、皆、狼に喰い殺されてしまう！」

「ルーウエル」

村人の手が肩に置かれた。

「お前の両親のことは気の毒に思う。でも、見えない狼に怯える必要は無いんだ。いい加減、村で暮らさないか」
ルーウエルは肩に置かれた手をそつと払った。絶望的な気持ちで笑う。……見えない狼だって？ 狼は現に、ここに居るじゃないか。いつだって、お父さんやお母さんを殺したように、村人たちの喉笛を狙っている。

「狼は……、来るよ」

言いかけて——そしてやはり、最後の最後で本当のこととは言えなかった。

もう一度祭りをやめるように言い、ルーウエルは往來を引き返した。陽が沈む前に森の小屋に帰らなくてはならない。そうでなければ——、

「——狼が来る？」

ルーウエルの思考に先回りするように、少女の声が聞こえた。見れば、村の出口に見覚えのある少女が立っている。保護者なのだろう青年と一緒にだ。

青年はルーウエルに警戒そのものの目を向けていたが、少女は親しげな様子で近寄ってきた。

「こんにちは、ルーウエル」

「えーっと……ナキ、だったっけ」

頭の片隅から少女の名前を引つ張り出した。どうやら正解だったようで、少女・ナキの笑みがますます輝く。

「今夜はお祭りなんですってね」

楽しそうにナキが言った。村の祭りが珍しいのか、興味深げな目を祭りの準備風景へと向けている。

「あなたは、お祭りには来ないの？」

「僕は……行けないよ」

首を横に振る。そして、黒い瞳で、ナキの茜色の瞳を覗き込んだ。

「ナキは村の外から来たんだよね。狼って、見たことあるかい？」

「無いわ。でも、本の挿絵で見たわ。犬みたいな姿をしているのでしょうか？」

「犬なんて可愛いものじゃないよ。黒銀色の毛並で、目がぎらぎら光っていて、爪と牙が鋭くて、血をしたたら

せて……嗤^{わら}うんだ」

狼を知らないナキの為に、昔見た狼の姿を思い出しながら伝えた。狼の怖さを知らないナキが、夜にうっかり外に出ないように。狼に出会った時に、そうとわかって、すぐに逃げ出せるように。

「満月の夜は、絶対に家の外に出てはいけない。でないと……狼が、来る」

「それは嘘？」

「ああ。僕は大嘘つきなんだ。だから、僕を信用しないで。でも、僕の言葉を聞いてくれ」

……我ながら、意味不明なことを言っていると思う。これではナキを戸惑わせるだけだ。

もつと上手い言葉は無いものかと思案していると、ナキが先に口を開いた。

「あなたのお父様とお母様のこと、聞いたわ。もう何年も前に……狼に殺されてしまったって。あなたが夜な夜な『狼が来る』と言うようになったのは、その時からだって」

「同情するかい？ 『見えない狼に怯えている、可哀想な奴だ』ってさ」

皮肉交じりの問いかけに、ナキは答えなかった。

ルーウエルは頭上を仰いだ。空が夕日に染まり始めている。今はやや雲が多いが、夜になれば晴れるだろう。「ナキ。君からも、祭りをやめるように言ってくれ。満月の夜は特に危ない。家に帰って、戸を固く閉じるんだ。狼が……来る前に」

ナキの横をすり抜け、村の出口から外へと飛び出す。この優しい村と、村に来たばかりのナキが喰い殺されないように……。それだけを願って、ルーウエルは森へと続く道をひた走った。

大嘘つきだから、僕のことには信じないで欲しい。でも、僕の言葉は信じてくれ——。

* * *

夜はあつけなく訪れた。

いつものように鍵をかけ、鎖を巻いた小屋の戸を、ルーウエルはベッドの上からじっと見つめていた。

村のことを思う——今頃、広場は祭りで賑わっている

のだろうか。狼の襲来にそなえて、剣や猟銃をちゃんと準備しているだろうか。

ナキのことを思う——初めて見る村の祭りを、彼女は楽しんでるのだろうか。それとも、聞いたばかりの狼の話の思い出して、家の中でおとなしくしてくれているのだろうか。

テーブルの上で、ロウソクの火が揺れている。窓を見ると、真つ暗な戸外の様子と、ガラスに映った自身の姿が重なって見えた。黒い髪に、黒い瞳——。

さっと、窓の外が明るくなる。空を覆っていた雲が晴れたのだ。

今宵は、満月。

月光に照らされた森を見ないように、ルーウェルは目を固く閉じた。

（——無駄だ——）

自身の中で声が聞こえる。

（——嘘をついた狼少年——）

心臓の鼓動が早くなる。体温が急激に上昇する。

（——運命を知った時点で、村を離れるべきだった——）
大丈夫だ、と言いつけさせる。ここ何年、何度も満月の

夜を無事に過ごせたじゃないか……。

一方で、否定の声上がる。

（——いつかは時が訪れると、解っていたはずだ——）
毎日、村に警告していた。だから大丈夫だ。今夜もちゃんと、戸は固く閉じられているはずだ。

（——誰も僕の言葉を信じない。それなのに、皆が僕の『嘘』を信じている——）

大嘘つきの狼少年。

両親が狼に殺された、と嘘をついた。

（——嘘について、自分が人間であるかのように振る舞った——）

あははっ……あまりのおかしさに、笑って目を開ける。
窓ガラスに映っていたのは、

黒銀色の毛並の、

黒銀色の瞳を光らせて、

残忍に嗤う、

——一匹の、四足の獣の姿。

ルーウェルが恐れていた、
“人狼としての自分”。

（誰から喰おう？）

……村のことを考える。

身体に纏わりついている布きれが邪魔だ。爪と牙で、服をびりびりに引き裂いた。

テーブルの上のロウソクが目映る。前足で殴りつけると、簡単に倒れて灯が消えてしまった。

(ここはつまらない)

出口を探して小屋の中をうろつきまわる。戸口は、ちよつとやそつとでは開かないように鎖が巻きつけてあった。かじりついて引つ張る。何度か繰り返すと、鉄の鎖をかみ砕くことができた。……普通の狼にはできないことが、自分にはできる。そう思うと、とても愉快だ。

本性を現した人狼は獯猛で手がつけられない。

——それを知ったのは、満月の夜に父親が豹変した時だった。

黒銀色の毛並を持つ人狼は、残忍に噛いながら人を喰い殺すことができる。

——それを知ったのは、満月の夜に母親の亡きがらを見つけた時だった。

黒銀色の瞳を光らせた人狼は、死の瞬間まで、人に害なす血に飢えた獣でしかない。

——それを知ったのは、村を襲いに行った父親が返り

討ちに遭って、瀕死の身体を引きずって帰って来た時だった。

幼い頃。自身が人狼の息子なのだと自覚した時。

「両親が狼に殺された」と、最初の嘘をついた。

自身が被害者の側に居る、と嘘をついた——。

鍵ごと木戸を壊すと、行く手をふさぐものがなくなつた。小屋を出て、地に足をつく。

(狼でなければ、友達になれたらどうか)

……ナキの事が頭をよぎる。次に出会ったら……きつと、八つ裂きにして頭からパクリと食べてしまうに違いない。

天を見上げると、煌々とした満月が頭上で輝いていた。

長く長く鳴き声をあげる……。

哀しいのか、うれしいのか、もう自身の気持ちも判らない。

(狼が、行くぞ！)

ただ、人の気配を求めて、森の中を駆け出した。

* * *

村のある方向から、祭りのざわめきが聴こえた。大勢の人間が居る気配。鉄の臭いや、かがり火が燃える臭いもするが、そんなものでは歩みは止まらなかった。

気持ちちはやる。

村の入口が見えた。

そこには、狼の出入りをふさぐように立つ、小さな影の姿があった。

少女だ。ふわりと広がる髪と、ふわりと広がるフリルのスカート——まぎれもなく、それはナキだった。村の入口に置かれたかがり火の明かりを背に受けて、彼女はぼつんと立っていた。誰かの訪れを待つように。

不意に悲しさと虚しさを感じた。

(ナキが……ここに居る……)

ここ——家の外に。あれほど狼が危険であると教えたのに、狼が来ると伝えたのに。

ルーウェルが大嘘つきの『オオカミ少年』だったからだ。誰も少年の警告など信じなかった。村はこれから狼に襲われる。

……こんなことになるのなら、最初から嘘などつかなければ良かった！

でも、後悔しても、もう遅い。

* * *

まだ大人にはほど遠い少女。

——その肌は薄く繊細だ。爪を立てればすぐに裂けてしまっただろう。頬を淡く色づかせる血は、溢れ出せば、深紅の薔薇のような色をしているのだろうか。

それを確かめるのは……とても簡単なことだ。

ナキの茜色の瞳が、狼の姿を捉える。その時にはもう互いの距離は至近と言って良いほどに迫っていた。

(ナキ)

狼は心の中で獲物の名を呼んだ。……ナキ。もしかしたら、狼が狼でなければ、友達になれたかも知れない少女。

彼女を食べれば——もう二度と、嘘をつけなくなるだ

ろう。嘘をつく必要が無くなってしまいうだろう。

その確信に、地を蹴る足がわずかに鈍った。

しかし、飛び掛かかる体勢はそのまま、突き出した爪も、剥き出した牙も、今更標的を変えることはできなかった。

ザクッ！

鈍く濡れた音が心を揺さぶる。時が止まったような気がした。いつの間にか固く閉じていた目を開ける……。

かがり火の炎に照らされて、幾つもの赤い水滴が宙を舞っていた。

茜色の二つの瞳が、こちらをじっと見つめていた。哀しげな……されど、どこか安堵したような感情を載せて。

時間が正常に流れ出す。

一拍遅れて、狼の体を激痛が襲った。右肩が熱い。

目にしたのは、自身と少女の間を阻む白銀色の輝き。

——この王国は大昔、多くの魔物にあふれていたらしい——。

白銀色の輝きを目にした瞬間、何故か、幼い頃に聞いた昔話を思い出した。

嘘みたいな、国の誕生秘話。

魔物を斬り払う伝説の白銀の剣——。

——否。刃を光らせていたのは、頑丈そうではあるものの、ごく普通の長剣だった。軽鎧を身にまとった一人の青年が、剣を構えて狼を睨みつけていた。

剣の切っ先が血に塗れている。血の香りがすべての臭いを塗り替える。狼はようやく、自身が斬られたのだけ知った。

「ご無事ですか、姫様」

青年が口を開く。警戒の目は決して狼から外されることはない。

ナギが応えた。

「ええ。でも、彼が」

「致命傷ではありません。油断しないで。コイツは危険です！」

……危険。迷惑そのもので、剣や猟銃で討ち殺すべき存在。

鉄の臭いをまとった人間が四方から駆けつけてくる。

走る軽鎧の音。正体は槍と剣で武装した兵士たちだった。
……一体、いつの間に近づいていたのか。

このままでは討ち殺される。

グルウ……！ と、のどが勝手に唸りを上げた。向けられる敵意が、殺意が、全てが気に食わない。

(全て、噛みちぎってやる！)

弱い獲物を狩るのはその後だ。まずは俺の狩り場で大きな顔をしている兵士どもから——ッ！

姿勢を低くして、一度で咽喉に喰らいつくくために狙いを定める。いざ飛び掛からんというところで、

「一言だけ、いいかしら」

場違いな明るい声が発せられた。

ナキだ。

周りの兵士たちが血相を変えるが、少女は気にせず狼へと歩み寄った。狼の黒銀色の瞳に、茜色の瞳が合わせられる。

「あなたは嘘つきね、ルーウエル」

間近でその声を聴いた途端、狼の思考が停止した。

* * *

——ナキが『狼』に向かって、『少年』に語り掛けるようにその名を呼んだ。

(……どうして……?)

戸惑う。

そして、『ナキが兵士を集めて狼を待ち伏せていた』という事実に思い至る。

泣きたくなった。

ナキは、『オオカミ少年』の言葉を信じてくれたのだ。

だから——彼女は狼を討つために、狼が来ることを信じて、満月の下に出て来ていたのだ。決して、警告を聞かなかつたわけではなかった。

ナキは、『狼少年』を信じないでいてくれた。

ルーウエルの『嘘』に気付き、その正体を見破った。

グルウ……！

泣き声の代わりに咽喉の奥から洩れたのは、鳴き声だった。

(……違う。僕が、ナキに伝えたいのは……)

狼は牙と爪でしか語ることができない。そんなものは無くて、きちんと人の声と言葉で、彼女ともう一度話をしたかった。

低い姿勢のまま後ずさる。地を蹴ると、狼は兵士の頭上を飛び越えた。追いつがるざわめきを、全力で引き離す。

森の中へと駆け込んだ。満月はまだ、天の頂きから地上へ光を投げかけていた……。

* * *

木戸を叩く音でルーウエルは目を覚ました。ベッドから身を起こす。外は薄暗い……夜明け前といったところだろうか。ベッドは血で汚れていた。右肩の痛みに顔をしかめて、小屋の中を横切り、木戸へと向かう。

戸を叩く音はとても丁寧だった。鍵はかかっている……昨夜、力のままに壊してしまったからだ。

木戸を開けると、明るい笑顔が外で待っていた。

「おはよう、ルーウエル」

「……やあ、ナキ」

少女の後ろに目をやると、長剣を帯びた青年が一人控えている。ルーウエルはこの青年を昨夜以前にも見ていることに気がついた。ナキに初めて会った時から、彼は常に、彼女のそばに居た。保護者のように——そしてそれ以上に、忠実な騎士のように。

「怪我の具合はどう？」

「おかげさまで。血は止まっているよ」

「それじゃあ、お散歩しましょうか」

ナキに促されて小屋の外へ出る。ルーウエルは辺りを見回した——が、近くに居るのは青年だけで、兵士たちの姿は無かった。

ナキの歩みについて行くと、森はずれの丘の上に出た。小さな花が一輪。少し離れたところに村が見える。……最期を迎える場所としては、悪くない。

月はもう沈んでいた。

「ここでもいいわ」

振り返ったナキが、スカートのフリルの合間から何かを取り出した。

白銀色に輝く拳銃だ。

——その昔。最初の王が、白銀色の剣で国中の魔物を斬り払った——。

「私の家は代々、魔物を退治してきたの。魔物の罪を裁くのが、王女としての私の役目なの」

白銀色の銃を胸に抱いて、ナキが微笑む。その笑みはどこか寂しそうで……けれども、決意に満ちていた。

『満月の度に狼の鳴き声がする』と、この辺りを通る旅の商人が怖がっていたわ。彼は何年か前に森で男女が狼に喰い殺されたという噂を知っていた。その事件が、満月の夜に起こったということも……」

「母さんは普通の人間、父さんは人狼だったよ」

言葉が自然と口から洩れた。一度口から漏れ出ると、あととはとめどなく溢れ出す。

「満月の夜は鎖をつけて家の中でじっとしているのが、僕ら家族の決まりごとだった。あの夜……じっとしているのがつまらなかつた僕は、丸くなって寝てしまった。起きたら、家中の鎖が引きちぎれていて、戸が開いていた。いつもより綺麗な月の光が、開いた戸口から、小屋の中に入ってきていた」

……月の光に誘われて外へ出た日のことを思いだす。血の臭いを嗅ぎ分けて辿り着いた森の奥で、ズタズタに

なった母親を見つけた時のこと。微かな鳴き声を聞き取って向かった丘の上で、狼の姿のまま倒れている父親を見つけた時のこと。

「月夜の夜に、家の外に出ちゃいけないかったんだ。残忍で獰猛な人狼が、ここに居るから」

自分の胸をトンツと指差す。大嘘つきの狼少年——嘘をついて、優しい村人たちの近くで暮らし続けた。それは大罪だ。

相手がナキなら、いつ裁きを受けても良い……そう思いながら、最期のつもりで問いかける。

「どうして僕が人狼だってわかったのか、聞いてもいいかい？」

「初めて会った時のこと、覚えているかしら」

ナキがくすりと笑う。

「陽が落ちて、真っ暗で。私は人影だけを頼りにあなたに話し掛けたわ。それなのにあなたは、私のことを『茜色の目のお嬢さん』って呼んだのよ」

「まいったな……」

人狼になると夜目が効くのだ。あの日は確か……帰るのが少し遅れて、月が始めていたんだったか。

「君、見えていないそぶりなんて、全然見せなかつたじ

やないか」

「王女ですもの」

誇らしげな彼女を見て、思わず笑みがこぼれる。

小さな王女を前に、片膝をついた。

「ナキに討たれるなら本望だ。僕を信じずにいてくれて、僕の言葉を信じてくれて……ありがとう」

もうすぐ、夜明けが来るだろう。闇の生き物が裁かれるのにふさわしい時間が。

目を閉じてその瞬間を待ったが——灼ける痛みはなかなかルーウエルを襲わなかった。

(……?)

怪訝に思っ顔を上げる。そして、目を大きく見開いた。

少し欠けた月が、森の上に姿を現すところだった。

「満月じゃなきや、完全な獣化はしないのね」

ふわりと耳を撫でられた。

興味深そうな声が間近で発せられる。ナキは月光に白銀色の銃を光らせながらも、それを構えることも無く、くるくると弄んでいた。

「夜……!?」

……どうやら丸一日寝ていたらしい。夜明けと聞いていのは、陽が沈んだ後の薄暗さだったのか。ナキに「おはよう」と挨拶されて誤解していた。

血の気が引くのを感じた。慌ててナキから距離を取る。

「人狼に夜会おうなんて、何を考えているんだよ!?」

「何を……『人狼に夜会おう』と考えただけよ」

眩い月を背負って、ナキが笑う。

「あなたは嘘つきね、ルーウエル」

茜色の瞳が、遠慮なく黒銀色の瞳を覗き込んできた。

「獰猛で残忍な狼なんて、森には住んでいなかったわよ。とっても優しく寂しがり屋な男の子が居るだけ」

「お立ちなさい、正直者さん。嘘以上の罪を犯していない者を裁いても、与える罰はないわ」

拳銃を持つ手とは反対の手が、ルーウエルに向かって差し出された。

戸惑う。

「でも……僕は人狼だ。魔物を殺すのが、君たちの役目なんだろう?」

「人と共にあるうと努力する者を、誰も『魔物』とは呼

ばないわ」

綺麗な月が頼もしい笑顔を明るく照らしだしている。堪えられなかった泣き声が、月夜の丘に微かに漏れた……。

* * *

ナキが王都へ帰り、一か月が過ぎた。

(結局、僕はナキに試されたのか……)

丘の上で満月を見上げながら、狼の姿でルーウエルはぼんやりと小さな王女のことを考えていた。

(僕が『罪を重ねるつもり』だったら、遠慮なく裁きが下されていたわけだ)

……彼女が月夜の晩にわざわざ人狼を訪ねた理由。あくまで推測だが、ルーウエルが『人』としての生を望むのか、『魔物』としての生に逃げるのか、それを見極めようとしていたように思う。万一の場合、彼女は微笑みを浮かべると同じくらい簡単に、白銀銃の引き金を引いたのではなからうか。

あの時差し出されたのが銃口では無くて、本当に良か

ったと思う。

『狼』であるという事実を受け入れてからというもの、獣化しても自身を上手くコントロールできるようになった。

村人たちは未だに、ルーウエルが人狼だとは知らない。村人たちに対して嘘をついていることに変わりはないが、人と共にあるうとする気持ちは前よりも強い。

——だから、森を出ることにした。夜明けと同時に、木戸にしっかりと鍵をかけるつもりだ。

——人と共にあるために、多くの人と出会いたい——。

人狼として、人の世でどんな役に立てるのか。それはまだわからないけれども。

丘の上から、月光の中にたたずむ村を見る。

(またいつか、満月の夜に帰って来る！)

嘘ではなく、心から。

狼少年は黒銀色の目を輝かせて、一人笑った。

【終わり】

《奥付》

作品名・「ナキ」オオカミ少年は月夜に笑う」

作者名・三々梨弥生

初回公開年月日・二〇一四年三月六日

公開ホームページ・「るなるえあ」天羽狐の創作室」

URL <http://luna-le-air.vivian.jp/index.html>